

大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

文禄2（1593）年5月、豊後の戦国大名大友義統は、朝鮮出兵時の不戦功を理由に豊臣秀吉から改易（所領没収）されました。その翌年3月に、隣国肥後の大名加藤清正が、次の指示を出した古文書があります。

「豊州の内によき医師、その外諸職人・白かねや・ほり物師などに上手これ有る由に候間、随分相尋ね、よびよせ申すべく候」。豊後国内には、技術の高い医師をはじめ、銀細工・彫り物などで優れた職人がいるこのうわさなので、尋ね当てて肥後に呼び寄せるよう、命じた内容です。

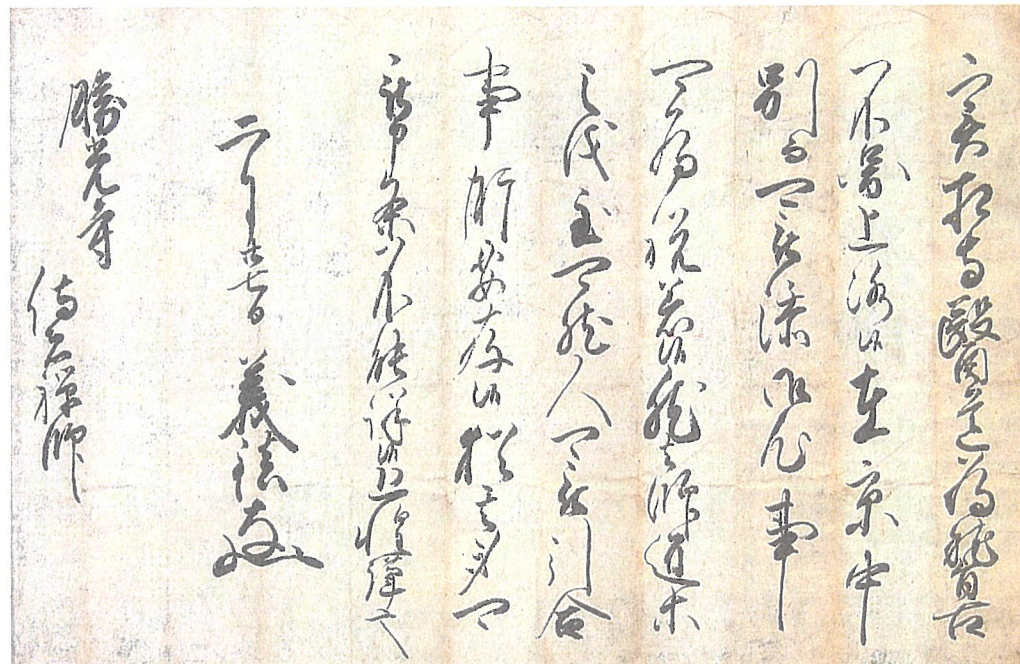
およそ400年続いた大友氏統治が終焉した豊後では、大名家臣の武士たちだけでなく、特に本拠地府内（大分市）で大友氏の下で活動していた有力商

人や、技術力の高い職人衆も離散する羽目となります。そこに目を付けた清正は、これを機に、豊後の「よき医師」の引き抜きを図ったのです。

実のところ、府内の医療水準の高さは相当なレベルだったようです。大友義鎮（宗麟）・義統父子2代の重臣で、岡城（竹田市）主の志賀親守は、「我らのこと、養生気に候条、在府候」（東洋医学の「気」の養生・治療のため、竹田を出て府内に滞在中）と述べています。

では、この史料が示す、周辺地域に比べての府内の医療水準の高さや、有能医師の存在はどこから来たのでしょうか。その答えを導く注目の古文書があります。義鎮が天文22（永禄5）（53）年の間（24～33歳時）に記した書状です。

実相寺の留学僧 医道稽古後、大名お抱えの医者に



実相寺某の「医道稽古」をあっせんした大友義鎮書状写（大分市歴史資料館蔵）

「実相寺医道稽古のため、図心を添えらるべきこと、祝着らず上洛候、在京中別して御たるべく候、然らば、師匠等の

儀、然るべき人に至り、引き合
わさるべきこと肝要に存し候、
なおその身申さるべく条、詳
らかに能わす候」

実相寺の僧が「医道稽古」（医学の勉強）のために京都に出向くので、在京中に心添え（世話）をしてもらえればありがたい。特に、医師習得の師匠として、適切な医師に引き合わせることが肝要だ。詳しくは本人から！との内容です。現代風に解釈すれば、豊後の実相寺の若い僧侶が京の都に医学留学するに際して、適切な師匠へのあつせん紹介状を大名自らしたためたようなものです。

この留学僧の具体的な名前はいずれも分りませんが、後にその実相寺某は、豊後に戻って大名お抱えの医者になったようです。大友氏領での正月の年中行事「枕飯振舞」（大名が家臣に振る舞う饗宴）の席では、医者衆を率いる、格の高い僧侶として席次を与えられています。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1回掲載